

1. 略歴

1992年3月	東京大学文学部心理学専修課程卒業
1992年4月	東京大学文学部研究生（～1993年3月）
1993年4月	東京大学大学院人文科学研究科宗教学宗教史学専攻修士課程入学
1995年3月	同修了（修士（文学）取得）
1995年4月	東京大学大学院人文社会系研究科基礎文化研究専攻宗教学宗教史学専門分野博士課程進学
2000年3月	同単位取得退学
2001年4月	聖心女子大学文学部専任講師
2003年4月	聖心女子大学大学院文学研究科専任講師兼任
2007年4月	聖心女子大学文学部准教授、聖心女子大学大学院文学研究科准教授兼任
2008年9月	博士（文学）取得（東京大学大学院人文社会系研究科）
2013年4月	東京大学大学院人文社会系研究科准教授

2. 主な研究活動

a 専門分野

死生学、宗教学、スピリチュアリティ研究、環境思想

b 研究課題

日本人の死生観、宗教研究、現代日本人の個人主義的スピリチュアリティ、サステナビリティと人文知

c 概要と自己評価

研究と教育の方向性は大きく二つに分けられる。一つは死生学・宗教学方面で、もう一つはサステナビリティ学方面である。この二つは、死生学・応用倫理センターの、「死生学」と「応用倫理」に対応する。

死生学方面では、日韓同時の死生観調査をおこなった。これは、現在の死生学で議論されている主要な論点を全てデータで検証しようという試みで、今後の死生学を刷新する潜在力を持っている。韓国の死生学研究所の研究者とともにパース大学で開催された死生学ではもっとも大きい国際会議で発表した。また、これらのデータにもとづいて、日本人が求める「良い死」の内容を類型化し、分析した。

この死生学方面の研究と関連するのが、スピリチュアリティ研究・宗教研究である。この2年間は、戦後から現代へとつながる日本の宗教史を政治面と社会構造的な面から俯瞰するような論集をそれぞれ2冊、単独の編者としてまとめている。また、現代人の個人主義的スピリチュアリティの従来からの研究の集大成とも言える単著を公刊し、反響を呼んでいる。以上の刊行物ともあいまって、社会的発信の機会が増えつつある。

一方、サステナビリティ学方面は、本研究科の教員が中心となって推進している総長裁量経費による「Sustainabilityと人文知」プロジェクトの実施責任者となり、研究交流を促進している。また、このプロジェクトの学内公開研究会を多分野交流演習として院生にも開いた。現在、東京大学はSDGs（持続可能な開発目標）達成に研究面から積極的に関与しているが、サステナビリティやSDGsへの学生・院生の関心は必ずしも高くない。とくに、文学部の学生の環境への関心が低いことが問題として見えている。コロナ禍という困難な状況ではあるが、学生の関心を高めるためにどのような方策が有効なのかを本学全体にも関わる教育課題として模索していきたい。いずれにせよ、この2年間でサステナビリティを人文社会系研究科の教員として研究と教育の両輪で進めるという道筋がはっきりとし、関係する教員の間で共有されたことが、今後につながる大きな成果と言える。

今後は、死生観の量的調査を続行し、死生観に関する基礎的なデータを提供することを当センターの社会的責務と位置づけ、着実に実行していきたい。とくにコロナ禍の死生観、倫理への影響を調査し、後世に残す責務があると言える。同時に既に終了している調査の成果を著書の形でまとめて世に聞きたい。東日本大震災から10年という節目の年を迎えるため、被災地でおこなった霊的体験に関する調査を、東北大学の高橋原教授との共著で1冊の書籍にまとめる予定である。また、島藺進名誉教授とおこなった川崎市におけるケア提供者の死生観、スピリチュアリティについての質的調査は、都市型社会における人々の苦しみの中核性、その中から立ち上がるケア提供者の来歴を丹念にたどった調査で、膨大な資料が蓄積された。これをまとめてゆきたい。また、サステナビリティ学方面では、多分野交流演習という形でサステナビリティと人文知に関心を持つ教員間の交流を続行すると同時に、海外の「サステナブルな人文」の動きとも連携し、学問的な体系化の方向を模索したい。理論面では従来からの未来倫理に関する探究をすすめ、感染症のみならず様々な想定外の危機に対応するリスク社会のエートスを明確化したい。

d 主要業績

(1) 著書

- 堀江宗正 (編著)、『いま宗教に向きあう 国内編1 現代日本の宗教事情』(岩波書店、2018.9)、「序論」1-22 頁、「争点1」25-34 頁、「争点2」75-85 頁、「第3章」86-105 頁(福嶋信吉との共著)、「争点3」127-167 頁、「第5章」203-214 頁(278 頁中、116 頁執筆)
- 堀江宗正 (編著)『宗教と社会の戦後史』(東京大学出版会、2019.4)、「はじめに」i-xv 頁、「序章」1-29 頁、「終章」295-348 頁(島菌進・黒住真との共著)、「年表」巻末i-xxiii 頁(396 頁中、121 頁を執筆)
- 堀江宗正『ポップ・スピリチュアリティ——メディア化された宗教性』(岩波書店、2019.11)

(2) 論文

- 堀江宗正「多分野交流演習「サステナビリティと人文知」開講に寄せて」、『多分野交流演習ニューズレター』第79号(2019.5)、頁番号なし(全5頁)
- 堀江宗正「日本における死と生の教育の通説を検証する— 一般的死生観調査に基づいて」、『死生学・応用倫理研究』25号(2020.3)、41-55 頁
- 堀江宗正「死生観(生死観)調査 SoVoLad(Survey on Views of Life and Death)」、『死生学・応用倫理研究』25号(2020.3)、56-93 頁
- 白岩祐子・堀江宗正「日本人の死後観——その類型と性差・年代差の検討」、『死生学・応用倫理研究』25号(2020.3)、119-141 頁
- 堀江宗正「人文知はサステナビリティにどう関わるのか——「サステナビリティと人文知」初年度を終えて」、『多分野交流演習ニューズレター』第80号(2020.3)、頁番号なし(全5頁)

(3) 啓蒙

- 堀江宗正「ハロウィーン——祝祭か暴動か 日常・非日常の境界の消失」、『中外日報』(2018.11.23)、8 頁
- 堀江宗正「池江選手ツイートへの反響——ドナー登録に向かう人々」、『中外日報』(2019.2.22)、8 頁
- 堀江宗正「米国で「無宗教」がトップに——宗教の政治的影響力、逆に増す?」、『中外日報』(2019.4.26)、8 頁
- 堀江宗正「代替わりと政教分離クライシス——論点は公費支出以外にも」、『中外日報』(2019.7.26)、8 頁
- 堀江宗正「武力象徴の「三種の神器」の剣 敬称宣言、象徴天皇制の危機」、『中外日報』(2019.9.27)、8 頁
- 堀江宗正「大嘗祭の核心は秘儀に 公的行事にふさわしくない」、『中外日報』(2019.11.22)、8 頁
- 堀江宗正「新型肺炎、陰謀論と差別感情——恐れるべきは精神的感染症」、『中外日報』(2020.2.28)、8 頁

(4) 学会発表

- 堀江宗正「ケア提供者の死生観・人生観・スピリチュアリティ」、上廣死生学・応用倫理講座『医療・介護従事者のための死生学——2018年度夏季セミナー』(東京大学、2018.8.19)
- 堀江宗正「ケアとスピリチュアリティ——川崎市のケア提供者の調査から」、日本宗教学会(大谷大学、2018.9.8)
- 堀江宗正「死を前にして生きる——良い死はあるか」、浅草寺仏教文化講座(丸の内マイプラザ、2019.7.19)
- 堀江宗正「死のタブーと「良い死」について考える——死生観調査から」、上廣死生学・応用倫理講座『医療・介護従事者のための死生学——2019年度夏季セミナー』(東京大学、2019.8.4)
- 堀江宗正「Sources of Influence on the Taboo of Death and a Good Death: The Relationship between Social Construction and Education among Japanese People」、The 14th International Conference on the Social Context of Death, Dying and Disposal (University of Bath、2019.9.7)
- 堀江宗正「Spirituality and the Meaning of Life: From the Viewpoints of Religion and Psychology」、Life, death and meaning: Eastern and Western perspectives (University of Birmingham、2019.9.9)
- 堀江宗正「日本人の死生観」、早稲田大学エクステンションセンター八丁堀校(2019.10.19-26)

3. 主な社会活動

(1) 学会

- 日本宗教学会、「宗教と社会」学会、日本社会学会、日本生命倫理学会